
俺と先輩（アホ）とその他

ミンチ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

俺と先輩アホとその他

【コード】

NO118E

【作者名】

ミンチ

【あらすじ】

はちやめちやでなんでもありの先輩。これはそんな先輩に主人公が振り回されまくるほのぼのしたお話。

第1話 変な先輩（前書き）

全て1から書き直しましたので、前よりだいぶ読みやすくなつたと思います。

俺と先輩（アホ）とその他

第1話 変な先輩

『来い』

午前の授業も終わり、今は昼休み。教室で昼飯を食べようとした時、先輩からメールがきた。

来い？ どこに？

メールを返信。

『自分で考えなさい』

無茶苦茶だな…

『ヒントは屋上』

それって答えなんじゃ…

『早く！』

はいはいわかりましたよ。

俺は昼飯を食べるのをあきらめ、しかたなく屋上へ向かった。

そして屋上に出る扉の前。

あれ？ たしか屋上って立ち入り禁止なんじゃ… もしかして気にしたら負けか？

なんて思いつつ扉を開けて屋上に出ると、先輩が腕をくんでえらそーに立っていた。

「遅い！」

いきなりむすっとした顔で怒鳴る先輩。

「無茶言わないください。これでも急いだんですからうそだけど。」

「…ったく、心配するじゃない」

「え？ なんですか？ 聞こえませんか」

「なんでもないわよ！ それよりまだ自己紹介してないでしょ？」

自己、紹介？ いったい何を言いだすんだこの人は…

「自己紹介って、先輩にですか？」

「ばかね！ 今更私にそんなもんしてどーすんのよ！ 読者によ！ 読者！」

先輩はなぜか怒りながら俺を指差す。

ドクシャって何だ！？

「すみません、意味がわかー」

「早く！」

キツイ目で睨んでくる先輩。

元々目つきが悪いせいもあって、かなり迫力がある。

「わ、わかりましたよ。 やればいいんですよ」

俺があきらめると、先輩は笑顔になり、

「じゃあスタート！」

と言って指を鳴らした。

「えーとー」

「どごむいてんのよ！ 上よ上！」

空を指差しながら怒鳴る先輩。

ほんつとわけわかんねえ…

俺は言われたとおり空を向き、訳のわからない自己紹介を始めた。

「はあ…」

あかさか
赤坂

シユウ
秀

16歳、高1つと、これでいいですか？」

「身長も」

「175cmくらい」

俺は何やってんだ…

「じゃあ次は私ね！ 名前は米原よねはら綾香アヤカ！ 17歳で高校2年生よ
！」

いったい何がしたいんだよ。

「身長は167cmくらいかしら」

空に向かって元気に自己紹介を始める先輩。

てゆうか今更ながら誰に話しかけてんだ？ ドクシャ…だっけ？
変な宗教に影響でもされたのか？

「趣味は—」

この後も先輩の訳のわからない自己紹介が10分ほど続き—

「ふう、ざっとこんなもんね—」

綺麗にまつすぐのびたロングの髪をくるりとさせ、俺の方を振り
返る先輩。

「終わりましたか？」

「ええ、終わったわ！」

とてもさわやかな笑顔で言う先輩。

「そうですか。じゃあ俺は帰ります」

そう言って帰ろうとするところ――

「待ちなさい！」

先輩は俺の肩をつかみ、俺をストップさせる。

「なんですか？ もう用は済んだんじゃないんですか？」

「何言ってるのよ！ まだ何もしてないでしょ！」

じゃあさっきの自己紹介はなんだったんだ……

「わかりました。何をすればいいんですか？」

「今から物まねするから見てなさい」

「見てるだけ、ですか？」

「ええ、見てるだけ」

見てほしいって……何？ もしかして変態？

「んじゃ始めるわよ！」

先輩はそう言うと屋上にある安全のためのフェンスに両手をかけ、

どこか遠くを見つめたした。

「もう嫌！ こんな毎日毎日イジメばかりの生活… 耐えられないわ！」

何だよそれ…

「あの…」

「なによ？」

むすっとした顔で振り向き、睨んでくる先輩。

「それ、何のマネですか？」

とりあえず気になったので聞いてみる。

「自殺志願者」

なるほど、そうきたか…

「…わかりました。続きをどうぞ」

自殺志願者か… ってどんだけブラックな物まねだよ！？

「今日はクツがなかったわ… ミカのしわざね」

先輩はまた自殺志願者のマネを再開した。

「アミは机を隠したわ…」

イジメを苦に自殺を希望するって設定か。

「サユは消しゴムを隠したわ…」

地味だおい。 てかどんだけ陰険な嫌がらせつけてんだよ。

「そして一番許せないのわ…」

いよいよラストパートか？

「毎日毎日熱っぽい視線を送ってくるリナ！ 耐えられないわ！」

いや、それはイジメとかじゃなくて…

「ここから飛び降りたら楽になれるかしら…」

ああ、変な流れのままシメに持っていくのか。

「鳥はいいわね… 自由に優雅で綺麗で自由で…」

今自由って二回言ったな。

「うるさいわね！」

先輩はとて不機嫌そうな顔をして睨んでくる。

「ええ！？ 何も言ってますんよ！？」

「なんか聞こえたの！ まあいいわ、帰りましょ」

「もういいんですか？」

「あきた」

先輩はそう言い残して屋上から出て行った。

俺は一人屋上に残される。

「ほんと、自由人だよな」

ま、そこが先輩らしくていいんだけど。

さて、明日はどんなやつかい事を起こすのやら……

俺と先輩（アホ）とその他

第1話 変な先輩（後書き）

どうでしたか？

感想、評価、お待ちしてます。

第2話 プレゼント

昼休み。

そろそろ温かくなってきたなあ。なんて思っていると、先輩がまた変な事を言い出した。

「ヒマね」

「そうですね」

昼飯も食い終わり、先輩と俺は屋上で寝転がってだらだらしていた。

「そっだ！」

さて、今度は何をいいだすんだ？

「ヒマだしSOS団でもつくー」

！？

「まってください！！ それ以上はだめです！」

ガバツ！ っと起き上がって先輩をとめる。

「なんでよ？」

睨んでくる先輩。

「とにかくだめです。そんなどこぞの憂鬱な少女みたいな発言」

「ふん、わかったわよ」

そー言って口をとがらせながらそっぽをむく先輩。

つたく、何をすねてるんだか。

…ん？

何か違和感が…

とゆうよりも誰かの視線を感じる…

俺はあくびをするフリをして、視線を感じる屋上のドアの方を見
てみた。

「…あ
」

誰かがドアのすき間からこっちを見ている。

だめだ、一瞬じゃ誰だかわからん。

「先輩
」

小声で先輩を呼ぶ。

「なによ？」

先輩はゴロンと転がってこっち側を向く。

「ドアのところに誰かいるんですけど、見えますか？」

「ドア？」

先輩は少し頭をずらしてドアの方をみる。

「……げ」

顔を少し歪ませる先輩。

「…先輩？ あの、聞いてますか？」

「え？ ああ聞いてるわよ」

「それで、ドアの所にいるのは誰なんですか？」

「…モエよ」

「モエって…先輩の妹の？」

米原 萌 よねはら もえ 同じ高校の一年生。なぜか俺が喋りかけると顔を真っ赤にして、『ご、ごめんなさいっ』とか言っただけに走って行ってしまっつ。

先輩いわく、『乙女心よ！』だそうだ。

ちなみに性格は先輩の正反対、奥手、引っ込み思案、まあおとなしい子だと思っっている。

「ええ… あ、そうだ」

急に表情が明るくなる先輩。

何か思いついたんだろう。でも…あの顔は絶対ろくなことを考えてない顔だな。

「シユウ、放課後もう一度ここにきなさい」

「放課後ですか？ でもなんで—」

「つべこべいわない！」

「わ、わかりました」

「じゃあ準備があるからもどるわね」

先輩はそう言って立ち上がり、屋上を出て行った。

準備って… いったい今度は何をするつもりなんだ？

…不安だ。

そして放課後。

俺は言われた通り屋上に来てみたけど、

「誰もいない…」

もしかしてすっぱかされたか？

なんて思っつつ、しばらくボーっと遠くの景色をながめていると、

「よくきたわね、待ってたわよ！」

声の方に振り向くと、先輩は腰に手をあてて入口のところまで立っていた。

「待ってたのは俺ですけどね。それで何の用ですか？」

「聞いて驚きなさい！今日はあんたのためにプレゼントを用意してあげたのよ！」

プレゼント？

「えっと…今日は誕生日でもなんかの記念日でもないはずなんですけど…」

「ええ、別に何の日でもないわよ」

自信たっぷりに答える先輩。

「ならなんで…」

「たしかあんた前から妹がほしいって言ってたわよね？」

「言ってますん！」

誰かと勘違いでもしてるのか？

「いいえ、あんたは口ではそんなこと言ってるけど目が語っているわ！ 妹がほしい！ とね」

デーン！ って感じで俺に指をさしながら叫ぶ先輩。

バカですか？ …… バカですね。なんて無茶苦茶なことを言うんだ…

「なら、もし俺の目が妹ほしいって言ってたとして、妹でもプレゼントしてくれるんですか？」

「そうよ」

平然と答える先輩。

…冗談だよな？

「遠慮します。全力で」

「いいから受け取りなさい！」

強引だな… まあでもプレゼントってのに興味がないわけでもないし…

「わかりました。ありがとうございます。それでプレゼントって何ですか？」

「やっと食いついたわね、好みがあると思うから妹候補をいくつか用意したの、どれか一つ好きなのを選びなさい」

そして先輩はサントが持っているような白くて大きな袋を取り出し、ゴソゴソと袋に手をつっこんだ。

……って

「その袋… どちら出したんですか？」

「うるさい」

「す、すいません…」

怒られた… なんで!?

なんでもありなんだ…

なんて思いながら俺が関心していると、先輩は袋から何かを取り出した。

「まずはこれよ」

そう言った先輩の手にあるのは…

「いりません！」

リコーダーだった。しかも小学校で使ってたやつだ。先輩が

「んじゃこれ」

次にでてきたのは小学校で先輩が背負っていたランドセル。…
妹候補って言うてませんでした？ 物ですよ？ それ。

「いりません」

「じゃあ次！」

次はスクール水着、たぶんあれも先輩が小学校で使ってたやつだ
ろっ…

「いりません！ てゆうかなんでみんな先輩の小学校のときの私物
なんですか！？」

「男ってそつちの方が興奮するんでしょ？」

小首をかしげる先輩。

「残念ながらそんな変な性癖は持ち合わせていません！ そんなマ
ニアックな物で興奮するのはごく一部の人のだけです」

「そつなの？」

「そうなんです」

すると先輩は

『うーん…』と少し唸ったあと、頬を赤らめながら上目づかいに俺を見つめ、

「じ、じゃあ私がプレゼー」

「いりません」

「な、まだ何も言っていないでしょー!」

「だいたいわかります。それより他にもっとましな物はないんですか?」

「ふん、最後にとっておきがあるわよ」

あ、先輩がすねてる。 まあいいか。

「じゃあそれでいいんでください。 もうそれもらって帰ります」

そろそろ疲れてきたし、早く終わらせよう。

「ほんとにいいのね?」

「はい。 何でもいいです」

期待なんかしてませんから。

「ならうけとりなさい! とっておきの妹候補! 私の妹よ!」

先輩がそう言いながら体をどかすと、後ろに先輩の妹のモエが立っていた。

おー本物の妹か。じゃあさっさともらって帰ー

「つてもらえるかああ！！！」

モエがプレゼント！？ なんて最後だけ人なんだ！？

「あ、あの…:よろしくお願いします」

もじもじと俺の前まで出てくるモエ。

いや、よろしくって言われても…

「ま、そーゆーことで今日からモエはシュウの妹よ！」

どーゆーことだよ…

「んじゃね」

そう言って帰っていく先輩。

「いやいや困ります！！！」

「何？ 何か不満でもあるの？」

先輩は眉間にシワを寄せて凄んでくる。

「いや、あの、いらないます」

俺がそう言つと、さっきまでずっとうつむいていたモエが急に顔をあげ、

「モエ、いららないんですかあ〜？」

目をうるうるさせ、泣きそつな顔をこっちに向けてくる。

「違う！ 別にいらないとかじゃないんだ、や、いるわけでもないんだが… ちよつと先輩… っていない!？」

くそ、いつの間にか逃げられた！

「う、うう〜」

「おわ!？ ちょ、落ち着けて！ 泣くな、な？ 頼むから！」

俺はその後、半泣きのモエをなんとか落ち着かせ、そのまま家まで送りとどけた。

モエを送った帰り道。空はもうだいぶ薄暗くなってきた、そんな中を俺は一人で寂しく歩いている。

結局今日は先輩に遊ばただけで終わったな…

てかモエとちゃんと話したのって初めてだよな。あれがちゃんとして言えるのかどうかは置いといて。まあ先輩と違っていい子そうだなによりだ。

でもなんで先輩は俺にモエを押し付けて帰ったんだろ…

ただの嫌がらせか？

謎だ…

第2話 プレゼント（後書き）

なんか手を加えすぎて逆に読みにくくなっているような…

ま、気にしないでいいっしょ！

第3話 であと？ その1

今日は日曜日。朝起きると先輩からメールがきていた。

「んん〜」

のびをし、眠い目をこすりながら携帯の画面を見る。

『12時にこつもん』

12時に肛門？ …あ、12時に校門か。12時に校門に来て
つてこと？ 相変わらず先輩のメールは内容がわかりづらいな。

なんて考えながらふと時計をみる。

…時計の針は11時45分をさしていた。

「…やば」

家から学校まで急いでも10分はかかる。

俺は急いで用意をすませ、学校まで走った。それはもう凄く走
った。

俺と先輩（アホ）とその他

「ハア…ハア…間に、合った…」

ぎりぎり12時に間に合った。　まだ先輩は来てないな。

「あ、あの…」

遅刻したら先輩に何言われるかわかったもんじゃない。　自分はいつも遅刻するくせに。

「えと、うう…」

にしても遅いな。　急に呼び出しといて、まあ呼ばれてのこのこと来てる俺も俺なんだが。　また変なことでも思いついたのか？

「あの一！」

「うわっ!?!」

振り向くとそこには私服のモエがいた。

「やっと気付いてもらえた…」

「なんだモエか。　びっくりした…　急に脅かすなよな」

俺がそう言つとモエは、軽く口ごもりながら、

「さっきからずっと呼んでましたよ」

と舌つたらずの声で言ってきた。

てかなんでさっきから俺と目を合わせようとしないんだろ。

「そなの？」

「はい」

「ってあれ？　なんでモエがここにいるんだ？」

「そーいえばなんでここにいるんだ？　誰かと待ち合わせでもしてるのか？」

「はい」　「12時にここに来るように言われたんですけど…　こないんですよう」

「ちなみに今はもう12時10分だ。」

「そーなのか。俺もここで待ち合わせてるんだけど、相手がこないんだよ」

「あ、同じですね」

「なぜか嬉しそうなモエ。」

「だな」

「偶然、な訳ないよな」…　「ああ、嫌な予感がする…」

「なあ、もしかしてここに来て言ったのって…」

「お姉ちゃんです」

やっぱりか… いったいあの人はどーゆーつもりなんだ。

あ、先輩からメールだ。

『今日は一日モエとデートさせてあげるわ』

デート？ なるほど、これが目的だったのか。

返事を返す。

『けっこーです。 呼び出しといて来ないなんていったいなんのつもりですか？』

『呼び出したけど私が待つてるとは言ってないわ。 以後、質問は一切受け付けないわよ』

くそ、はめられた…

「どーかしたんですか？」

どうしようか考えていると、モエが声をかけてきた。

ああそうか、モエは先輩にはめられた事に気付いてないのか。

よし、モエに本当のことを話して今日は帰ろう。 先輩の思い通りにばっかりなつてたまるかっての。

「なあモエ。 実は俺達先輩にだまさー」

らんらん、らんらんらんらんらん

突然、どこかで聞いたことのあるような歌が俺の言葉をさえぎった。

な、なんだ!?

「あ、ごめんなさい。電話です」

なんだモエか。 てか着信音ナウ カなのか!?

それになんてタイミングの悪い電話だ。 まるでわざと俺の邪魔をしてるみたい… まさか!?

「うん、うん、わかった。じゃあね」

「お、おい、今の電話の相手って…」

「お姉ちゃんからでした」

しまった… さすが先輩、仕事が早いな。

って関心してる場合じゃないな。

「先輩なんて言ってた?」

モエは携帯をバックにしまい、頬に指をあてながら少し考える仕事をした。

「えっと、三人で遊ぼうと思ってモエとシュウくんをここに呼んだらしいんですけど、急用で遅れるから先に二人で遊んでて言ってました」

「そ、そうなんだ。それじゃあしかたないな〜」

「やられた… これじゃ帰れないな… しかたない、少し付き合っ
か。」

「ってことはシュウ君と二人きり… ひゃあ！」

モエが何かを呟き、顔を真っ赤にしてしゃがみ込んだ。

「どーしたんだ！？ 腹でも痛いのか？」

俺がしゃがみ込むモエに近こうとすると、

「な、なんでもないです！」

と言って急に立ち上がった。

「ああそう？」

姉妹そろって元気だなあ〜。

「はい」

「お、おう…」

モエはうつむいたまま相変わらず目を合わせようとしない。

「き、気まずい… 先輩、助けてください！ どーせどっかから見
てるんでしょ！？」

先輩からメールがきた。

『YES』

人の心なんてよんでないで助けてください！

『お昼』

お昼？ …… そうか！

「あのさ、ボーっとしてるのもなんだし、とりあえず昼飯でも食べに行かない？」

とモエに提案してみた。

「ああダメですよこんなところでっ。でも…シユウくんならー」

しかしモエはなんだか一人で危ない世界に浸っていた。俺なら、なんなんだ？

「おーい、なんか色々大丈夫か？」

「ひゃっ！？ はははいいい！ お昼ご飯ですね行きましょう大賛成です行きましょう！」

俺の声でこっちの世界に戻ってきたモエは、かなりテンパリながらどこかに向かって歩きだした。

さすが、先輩の妹だけあってモエもなんか…変だ。

「ちょっと待った！ まだ何食うかも決めてないのにどこ行くんだよ？」

するとモエはピタリと立ち止まり、とてもぎこちない笑顔でこちらに振り返った。

「は、はは… ごめんなさい…」

ええ！？ 何で！？ 何で謝るんだ！？

「えっと、なにか食べたい物とかある？」

「シュウくん…」

「へ？ 俺？」

声が小さくてよく聞こえなかったが、確か今シュウくんって言ったよな…

「いやっ！ ち、違います！ シュ…シューマイが食べたいなあ〜と思って！」

なんだ、シューマイか。

「おっけ、じゃあ行くか」

「は、はいっ」

シューマイかあ、ラーメン屋にでも行くか。

そして俺達はラーメン屋に向かって歩きだした。

にしてもモエってイメージしてたのと違うな。なんか喋る時とかもぎこちないし、もしかして嫌われてんのかな…

あ、先輩からメールだ。

『鈍感』

なにがですか？

俺と先輩（アホ）とその他

第3話 で一と？ その1（後書き）

続きます。

第4話 ーと？ その2

「うまいな」

「ですね〜」

俺達はあれから10分ほど歩いたところにあるラーメン屋で昼飯を食うことにした。

俺もモエもしょうゆラーメンだ。 なかなかうまい。

ただ一つ失敗してしまったことがある。

それはラーメン屋にシューマイが置いてなかったということだ。よくよく考えてみれば俺にはラーメン屋でシューマイを食った記憶がない。 まあ、モエも気にしてないみたいだし大丈夫だろう。

「あ、そうそう」

「はひ？」

ラーメンを口に入れた状態のままこっちを向くモエ。

「ああ悪い、先にそれ飲み込んでくれ」

「わかりまひは」

「いやだから早く食えって」

「ひゅいまひえん」

「……」

こいつバカか？

どんと胸のあたりを叩き、口の中のものを無理矢理飲み込んだモエ。

「それで、どうしたんですか？」

はあ、やっとか。

「あのさ、同い年だしその敬語はやめないか？」

そう言つとモエはきよとんとした顔になり、

「モエ、敬語になってますか？」

何を言ってるんだこの天然娘は…

俺は軽く呆れながら答える。

「ああ、なってる」

「うう、、すいません…」

うつむきながら謝るモエ。

「それだそれ！ ごめんでいいって」

なんか俺がいじめてるみたいだな。

「はい… じゃなくて… うん？」

「まあ無理に直さなくてもいいけどな、それはそれでモエらしくていいかもしれないし」

急に変わると言われても難しいだろうしな。

「モエらしい。ですか？」

首をかしげながらこつちを見てくるモエ。

なんか、かわいいな。 って何を考えてるんだ俺は…

「ああ、雑な先輩と違って丁寧にモエらしいよ」

俺がそう言うとモエは顔を赤らめ、照れだした。

「えへへ」

なぜ照れる！？ そんなに嬉しいことか？

ここで先輩からのメールを受信。

『死ね』

なぜ！？ 何かしたか俺！？

「あの、顔色悪いですよ？」

心配そうに見つめてくるモエ。

「あ、いや、なんでもない！ それよりそろそろ行くところか」

「はい」

ちなみに飯代は、先輩の指示で俺が払わされた。

まあ別にいいんだけどな。 だいたい予想はしてたし。

そして俺達は店を出たあと、特にすることもないので近くにあるショッピングモールをぶらぶらすることにした。

途中、先輩から『手、つなぎなさい』とメールがきたが、もちろん無視することにした。

二人で並んで歩く姿は本当にカップルのようだ。 ……だけど会話が
がない、気まずいな。 何とかして会話を生まないよ。

そして俺はベタに、

「モエって好きな人とかいるのか？」

と自然に聞いてみた。

「へ！？ いやっ！ あの、その…」

なぜかテンパるモエ。

あれ、変なこと聞いちゃったか？

「あ、言いたくなかったら言わなくていいからな？」

「そ、そうじゃないんですよう〜 モエはシ、シユウ君、が… う〜」

モエは顔を真っ赤にしながら下を向いてしまった。

やば、さすがに年頃の女の子に好きな人を聞くのはまずかったか。

とここでまたメールがきた。

『殺』

「こわっ！？ 怖いですって！ 確かに今のは俺が悪かったですけど。」

『そこじゃない』

へ？ じゃあなんなんだ？

『自分で考えなさい』

何かしたかあ…？ 俺。

「あの…」

何のことか考えていると、モエが声をかけてきた。

「ん？ どした？」

「楽しく…ないですか？」

モエは今にも泣きそうな顔で聞いてきた。

「そんなことないって！ 楽しくなさそうだったか？」

「はい、なんか難しい顔してました…」

おっと、ついつい一人の世界に入ってしまったたな。

「わるい！ ちょっと考え事をしてて」

両手を合わせ、少し頭を下げる。

「本当、ですかあ？」

「ああ本当だ」

だからそんな目をつるつるさせないでくれ。

「なら、よかったです！」

ニコツと笑顔になるモエ。

「おう、お詫びに何かおごるよ。 何がいい？」

「い、いいですよそんなの！」

両手をブンブンしながら断るモエ。

「本当にいいのか？ 遠慮しないでいいぞ？」

「あ、えと、じゃあ……」

そう言いながらもじもじとするモエ。

「なんだ？」

『裸になって幼稚園に乗り込んでください！』

先輩は黙っててください。

俺は先輩からのメールに心の中でツッコみつつ、モエが口を開くのを待った。

「今度、今度シュウくんの家遊びに行っていていいですか？」

「いいけど、そんなのでいいのか？」

「はい！ いいんです！ それがいいんです！」

なぜか必死になるモエ。

「ならいいけど。でも別に何も無い普通の家だぞ？」

「いいんです！ 楽しみに待ってますね！」

モエはなぜかとてもテンションが上がっている。

そんなに喜ばなくても… 何を想像したのか知らないけど、変にハードルを上げられてがっかりされても困るような…

らんらん らんらんらんらん

とここでモエの電話が鳴る。

「あ、お姉ちゃんからだ」

なに、今度は何をするつもりだ？

「もしもし〜 うん。そーなの？ わかった〜」

電話を終え、携帯を閉じたモエに恐る恐る聞いてみる。

「先輩、何だつて？」

「ちょっと緊急事態だから帰ってこいって」

「そ、そうか」

ってそれだけ、か？

「えっと、じゃあ……」

「口ごもるモエの代わりに俺が一言。」

「んじゃ帰るか」

「…うん！」

一瞬だけ悲しそうな顔を見せるモエ。

まだ遊び足りないのか？

そのあと俺はモエを家まで送り届け、自分の家に着いた頃にはもう日が半分沈んでいた。

にしても最後の電話、珍しく先輩が変なことを言わなかったな。

まあ、それにこしたことはないんだが。

後日、先輩が『わかる乙女心！』とゆる一本を俺に買ってくれたが、意味がわからなかったの、俺がこの本を読むことはなかった。

俺と先輩（アホ）とその他

第4話 で一と？ その2（後書き）

第5話 個性ってなんだ？

「平和だ」

最近、昼休みは屋上でダラダラするのが日課になっている。

今日も屋上で大の字に寝転び、空を眺めながらゆったりしている。

どーせすぐに騒がしくなるんだ、今のうちにこの平和な時間を満喫しよう。

「シュー！」

噂をすればなんとやら、屋上のドアを勢いよく開け、先輩が現れた。

「今日も元気ですね」

「ええ、それよりもあんたには失望したわ！」

寝転んでる俺の顔を先輩が覗きこんでくる。

「はい？」

「昨日のことよー！」

昨日のこと、といえは…

「先輩がモエと俺を無理矢理デートさせたやつですか？」

「そうよー！」

「それがどーかしたんですか？」

「私はベタが嫌いなの」

誰も先輩の好き嫌いなんて聞いてない。

「そうなんですか。それは知りませんでした」

眠いので適当にあしらう。

「まじめに聞いてんの！？」

先輩の額にシワが集まる。

やば、ちよつと怒り気味だ。

「聞いてますよ。 いったいなんなんですか？」

「なんなんですか？ じゃないわよー！」

むかつく感じに俺のセリフを繰り返す先輩。

もしかして今の、俺のマネか？

「とにかく！ 私はシユウが最近ならお約束というくらい多い、女の子の気持ち全然わからない鈍感主人公だったってことに失望してるのー！」

は！？ シュジンコウ？ なんだそれ！？

「すいません。言ってる意味がよくー」

俺はそう言いながら上半身を起こす。

「うるさい！ あなたには個性がないのよ！ 主人公は個性が命！

あなたは地味よ、地味！」

俺を勢いよく指差す先輩。

ああ先輩、あなた今思いつきり俺の目ついてますよ。

てゆうか、

「地味って……」

ちよつとシヨックだったりして…

「あんたもちよつとはね、撲殺なドクロの宮 君なり、憂鬱な 泉
なり、ラッキーな白 みのるなりを見習いなさい！」

「あの、それ全部主人公じゃない気がするんですけど……」

「細かいことは気にしない！」

「はあ……」

くそ、なんか悔しいな。

「個性がほしかったら必殺技でも身につけなさい！」

先輩が人差し指をひらひらさせながら、またトンデモ単語を言っている。

「必殺技、ですか？」

「そうよ、一流の執事たるもの、必殺技の一つや二つ持っていて当然よ？」

ああ、話についていけない… 執事とか訳わかんないこと言うるし。

「あの、そもそも個性なんてどーにかできるもんなんですか？」

先輩は俺の質問を鼻で笑い、

「甘いわね！ そんなもんどーにかするに決まってるじゃない！」

さも当然のように言い放った。

「なら、どーすればいいんですか？」

「そうね… 語尾になんかつけてみたら？」

「例えば？」

「しゅるとか」

「嫌ですよそんな武士みたいな語尾」

「じゃあニヤン」

「ベタです」

ベタは嫌いなんじゃないの？

「ん〜 星ならどつ?」

「星?」

「それなら誰もやってないでしょ?」

そりゃそーだろ。

「星なんて語尾につけてもなにも変わらない気が…」

「あんなにか勘違いしてない?」

「なにがですか?」

「星は星でもこの星よ」

そうやって先輩は屋上に落ちていた石で壁に『 の絵を描いた。

ああ、星マークのことが。

「じゃ、さっそく言ってみて」

相変わらずすごい無茶振り…

「星マークの発音なんてできません」

「ええ！？ ほんとに言ってるの！？」

いや、そんなびっくりされても。できなくて当然だから。

……できないよな？ 普通。

「ほんとです。そもそもこの世に星マークの発音なんてできる人がいるんですか？」

「いるわよ」

まじかよ…

「そんなおもしろ人間、どこにいるんですか？」

「後ろ」

俺の後ろを指差す先輩。

「へ？」

俺は後ろを振り返る。

そんなベタな展開があるわけー

「あの、こんにちは」

えるモエ。

「うわ…」

あいたたたあゝ さすがにこれはちょっと…

「そ、そんな目でみないでくださいゝ モエは、モエはがんばりま
したよお！ う…うわああん！」

モエは泣きながら屋上から出て行ってしまった。

あいつ、いったい何がしたかったんだ？

「最低ね」

「ええ！？ 俺のせいすか！？」

先輩が冷めた声で呟く。

「まあいいわ」

いいのか！？

「先輩、もう語尾はあきらめましょう」

語尾なんて元からつける気なんてないし。

「そうね、他の手を考えましょ」

「まだやるんですか！？」

「あたりまえじゃない」

「めんどくさいんでいいですよ。それじゃ俺は教室に戻ります」

変なこと言わされる前に早く逃げないとな。

教室に戻ろうとドアに向かって歩きだそうとすると、先輩が俺の肩を掴んだ。

あ、なんかデジャブ。

「わかったわ！」

俺の前に回りこんでくる先輩。

…顔が近い。

「なにがですか？」

「シユウに足りないものよ」

俺に足りないもの？

「なんです？」

どーせ野菜とかくだらないこと言っただろうな。

「たまには自分で考えてみたら？」

「うわ、顔がマジだ。」

「俺に足りないものか…… あ、

「わかりました」

「なに？」

「優しくてまともな先輩です」

「……………」

「黙って睨んでくる先輩。」

「なんて眼力、それにすごいプレッシャーだ…」

「なんかすいません…」

「先輩を怒らすと後が怖いからな。」

「わかればいいわ。ちなみに答えはツッコミよ」

「ツッコミって、ボケとツッコミのツッコミか？」

「あのツッコミですか？」

「そう、シュウのポジションはツッコミ以外考えられないのよ！」

「ポジションってなんだよ…」

「でも俺ツッコミなんてできませんよ？」

「だから言ってるのよ。できるなら足りないとか言わないわ！
それでツッコミの先生を用意したわよ」

「またですか？」

「ええ、後ろにいるわよ」

「またか！？」

俺はシュバツと後ろを振り返る――

が、そこには誰もいなかった。

「うそよ。残念ながらツッコミの先生はみつからなかったわ。
それは自分で勉強してちょうだい」

肩をぽんぽんと叩きながら言う先輩。

「……………」

なぜそんなくだらしない嘘をつくんだ…

「んじゃ戻るから」

そう言って先輩は屋上を出て行った。

…くそ、なんだこの敗北感は。

俺と先輩（アホ）とその他

すっげえ負けた気がする。

ツッコミか… 考えておじつ…

第5話 個性ってなんだ？（後書き）

あゝ 誰か感想とか評価とかアドバイスとかしてくれないかなあ

…

あ、どーも僕です。

さあ！ どんどん更新していきますよー！！！！

第6話 新キャラの季節

クラスに一人はいるお調子者。

「どしたんや〜？ えらい変な顔して」

それがこいつ、谷口たにくち和馬カズマだ。同じクラスで、中二の時に俺が通っていた中学に転校してきて以来、ずっと親友をやっている。親の都合で何回も引越しを繰り返してるせいか、喋り方が変だ。

昼休み。俺が購買で買ったパンを食べていると、カズマが喋りかけてきた。

「別に普通だ。あと変な顔はしていない」

「おつとわるいわるい。変な顔やなくて暗い顔やった」

カズマは俺の前の席に後ろ向きで座る。

「どーやったらそんな言い間違いするんだよ」

「まあ気にすんなよ。つてか今日はアヤカさんのところ行かへんのか〜？」

俺のパンを奪い、食べようとするカズマ。

「別に俺が行ってるんじゃないくて、俺が行くところに先輩が現れるだけだ」

それをさせまいとカズマの手からパンを奪い返す。

「それって一緒ちゃうん？」

パンを奪い返され、諦めるふりをしてもう一度パンを奪おうと手を伸ばすカズマ。

「全然違う。別に俺はつと、あんパンはやめろ！」

「ふふふ… このあんパンの命が惜しくば、代わりにそのいちごジャムパンをよこすのだ」

「チツ しかたない」

俺は人質にとられたあんパンを助けるべく、しかたなくいちごジャムパンをカズマに渡すことにした。

「サンキュ！ てかさ、前々から思ってたんやけど」

パンを食いながら起用に話すカズマ。

「シユウ、お前はツツコミのスキルを手に入れた方がええと思うねん」

「な！？ ツツコミって… こいつ、昨日の先輩と俺の会話聞いたのか？」

「急にどーしたんだよ？」

「いやな、前からずっと思ってたんだけどタイミングがなかなか

くちな

カズマまで俺にツッコミをしるいつのか…

「そうなのか… ツッコミって、難しいか？」

「お、食いついたな。 ツッコミできるよつになりたいか？」

なぜかマジ顔のカズマ。

「ま、まあちょっとくらいなら…」

「ほな行くで！ ツッコミの練習や！」

そう言うとカズマは持っていたパンを口に押し込み、勢いよく立ち上がった。

「行く？ ってどこに？」

「んなもん決まっとるやないか！」

こうして訳もわからないまま、俺はカズマに拉致られた。

「着いたで」

俺がカズマに連れてこられた場所、そこは—

「なぜ、屋上なんだ？」

屋上は基本的に立入禁止だ、前までドアにもカギがかかっていた。なのでまずここに来ようなんて思うやつはいない、はずなんだが…

なぜこのカギが空いてると知ってるんだ？

「練習といたら屋上やる？」

いや、違うだろ。

「で、お前はいつたい何がしたいんだ？」

「ツッコミの練習に決まってるやん！」

…そーなんだ。

「練習って… 何するんだよ？」

「んゝ そやなあゝ 今からオレがボケるからそれにツッコんでくれ！」

「どーやってツッコんだらいいんだよ？」

「んなもん適当でええねん！」

「わ、わかった」

なんでこいつこんなに張り切ってるんだろ… ちょっとづいかも。

「よっしゃボケるでえー！　ってなんかめんどくさなってきたなあ、
やっぱやめへん？」

「は？　別にやめるならいいけど」

「このドあほ！！！！」

「ぐあー！！」

急に俺を殴りとばすカズマ。

「何すんだよ！？」

「とんだおとぼけさんやなあオイ」

カズマは倒れた俺に馬乗りになり、俺の胸ぐらをつかんで少しだけ引き寄せる。

「ちょ、顔が近い」

「今のはなあ、今のは」

だめだ全然話を聞いてない…

「今のはボケやあ！！！！」

俺の顔の前で力いっぱいに叫ぶカズマ。

うわ！？　唾が！？　汚ね…

顔中に唾をとばされ、へこむ俺を無視してカズマは語り出した。

「今のはな、オレがボケるぞ！ って気合い入ってたのに、急にやる気なくなっただんに『どないやねん！』ってツッコむところやろ？」

そーなのか、ってわかるか！？

「とりあえずその、すまん」

「まあまだシユウにはレベル高すぎたかもしれんなあ。 ってもうこんな時間やないか！？ 授業始まってまうで！」

何もない腕を見ながら慌てる仕草をみせるカズマ。

腕時計のつもりなのか？ ならツッコまないとな。 よし。

俺は起き上がり小さく気合いを入れ、全力でツッコんだ。

「それ、別に腕になんもついてない」

キーコンカーンコン

しかし俺の全力のツッコミも、昼休みの終わりをつげるチャイムにより消失した。

「……………」

「……………」

「……さ、戻ろかな。 まあ続きはまた今度な！」

そー言ってカズマは屋上を出て行った。

ったく、どーしてこーどいつもこいつも自分勝手なんだ…

「…やば」

俺も遅刻じゃねーか。

第6話 新キャラの季節（後書き）

ども、ミンチです。

新キャラですね。

いや、別にそれだけです）、）、（

俺と先輩（アホ）とその他

第7話 試作品（前書き）

更新遅れて申し訳ありません！！

俺と先輩（アホ）とその他

第7話 試作品

日曜日。

朝、目が覚めていつも通り二階の自分の部屋から一階のリビングへ行く。冷めたご飯がテーブルの上のっている。いつもと同じだ。親は共働きで家には誰もいない。これもいつもと変わらない。洗面所へ行き、鏡にうつった自分の顔を見る。今日も相変わらず無愛想な顔だ。今日もいつもと同じだな。

…いや、何か違う、いつもと何かが違う気がする…

なんだ、この違和感—

「暗いわ!」

「うわっ!?!? せ、先輩!?!」

いきなりの怒鳴り声と共に、先輩が背後に現れた。

「暗いのよ! 始まり方が! コメディーでしょこれ!」

は? コメディー?

ってかなんで先輩が家にいるんだよ!?

「どっから入ったんですか!?!」

「合いカギよ!」

そう言って自慢げに我が家の合いカギを俺につきつける先輩。

「どーして合いカギなんか持ってるんですか!？」

「つくった」

平然と答える先輩。

合い鍵なんていつの間...

「そんな軽々しく言わないでください。 犯罪ですよ?」

「うるさいわねー 男のくせに」

「男とか女とか関係ありません。 とにかくこれは没収しときます」

目の前にある先輩の手からカギを奪い取る。

「あ、返しなさいよー!」

両手を伸ばして鍵を奪い取るうとする先輩。

「ダメです」

「じゃあいいわよ!」

あれ? 今日はあきらめがいいな。

「まだいっぱいあるし」

「なんか言いましたか？」

「何も言っていないわよ？」

両手を大袈裟に広げてとぼける先輩。

「そですか。それで、こんな朝早くから何の用なんですか？」

「知りたい？」

目をキラキラと輝かせる先輩。

ああ、嫌な予感がする…

「知りたくないです」

「なら聞きなさい！」

結局言っただ…

「今日はこれで遊ぶわよ！」

そう言った先輩の手には、いつの間にか首輪みたいな物と、携帯電話みたいな物が握られていた。

「…それ、どこから出したんですか？」

「さあね。とにかく行くわよ！ 5秒で用意しなさい！」

なんて無茶をマジ顔で言う先輩。

「無理です」

「やってみないとわからないでしょ！ さあ早く！」

先輩が急かすので、俺は仕方なく用意を始めた。

「はあ、わかりましたよ。今から用意しまー」

「はい5秒たったあ！ さあ行くわよ！」

「ええ！？ ちょ、ま、無理ですって！ まだ何もしてなー」

ゴン

「ぐあー！」

突然後頭部に衝撃が走り、俺はそのまま意識を失った。

「う…ん？」

「…あ」

目を覚ますと、なぜか目の前に先輩の顔があった。

「…何、してるんですか？」

「あ、わ、ち、違うのよこれは！」

先輩は顔を真っ赤にし、すごい勢いで後ろに跳んで俺から離れた。

「何が違うんですか… てゆーかここ、どこですか？」

周りをみるとそこは近所の公園だった。公園はそれなりに広く、ブランコやすべり台などの遊具がある所と、何も無い芝生のみのものである。

そして俺は今、芝生の上に寝転がっている。

あれ… さっきまで自分の家にいたような…

「違うのよ？ 私は寝顔がかわいかったからちよつと見てただけ、別にその、キ、キキキ、キスしようとしたとかそんなんじゃないかな？ 本当に？ でも、あともうちよつと時間があったら… ふふふ…」

先輩はなにやらぶつぶつと呟き、一人の世界に入り込んでしまっている。

「先輩、聞いてますか？ おーい」

完全に無視だな。なんかこーゆーとこ、モエに似てるかも。

しかたない、とりあえず起きるか。

そう思い、重い体を動かさなんとか立ち上がる。

「ぐあー！」

しかし立つたのとほぼ同時に頭に激痛が走り、俺はその場に膝をついて崩れた。

「だ、大丈夫！？」

俺の声を聞き、こっちの世界に戻ってきた先輩が心配して駆け寄ってくる。

「正直、大丈夫じゃないです。ところで先輩」

「な、何よ？」

「俺に、何かしましたか？ 記憶がない上に、後頭部にとても激しい痛みを感じるんですが」

「別に何もしてないわよ？」

「ならなぜ俺と目を合わせようとしないんですか？」

「そんなことないわよ？ そ、それより早くこれで遊びましょー！」

先輩は強引に話題を変え、さっきの首輪と携帯電話みたいなものを取り出す。

「はあ、ところでそれ、いったいなんなんですか？」

「これ？ これはねー」

先輩は首輪& a m p・携帯電話
みたいな物の説明をしてくれた。

「つまり、先輩の知り合いが勤めてる会社の新商品であるその犬語翻訳機（わんげく）を実際に使って、ちゃんと作動するか確かめればいいわけですか」

「そーゆこと。この首輪を犬につけると、こっちの画面に犬の言ったことがでてくるのよ」

「へえ〜」

ちよつと面白そうだな。

「じゃあさっそくそこらへんの犬にこの首輪をつけてきてちょうだいー」

首輪を俺に手渡し、につこりとはにかむ先輩。

「…やっぱり、俺が行くんですか？」

まあなんとなくわかってたけど。

「当たり前じゃない！ なんのためにあんたを呼んだと思ってるの？」

「一人じゃ寂しいから」

「ばっ、ばか！ そんなんじゃないわよ！」

あれ、もしかして凶星か？ いや、先輩に限ってそれはないよな。

「ほら！ 早く行きなさい！」

「はいはいわかりました」

顔を赤くした先輩に急かされ、俺はしぶしぶ犬さがしに出発した。

「いない」

その後、10分ほど周りを探したが犬はみつからなかった。

しかたない、先輩の所に戻るか。

「お、シユウやないか！」

先輩の所へ戻る途中、俺は聞き覚えのある声に呼び止められた。

「ん？ なんだカズマか」

振り返ると同じクラスのカズマが、ジャージのズボンにTシャツとゆるラフな格好で立っていた。

「なんやいきなりひどいこと言うなあ。　　ってかこんなとこで何してるん？」

「見てわかるだろ」

俺は大袈裟にため息をつき、首を振る。

「ああ、アヤカさんか　二人とも本間仲ええなあ。　　んで今日は何させられてるんや？」

「野良犬を捕まえるってさ…　あ」

いいこと思い付いた。

「カズマ、ちょっとばかり頼みがあるんだが…」

「ん？　なんや？」

「行ってきましたよ」

「遅い！　それで犬は捕まえてきたんでしょうね？」

先輩はこちらには振り向かず、犬語翻訳機をいじりながら返事をする。

「はい、これです」

そうやって俺は犬、に成り切つてよつんばいになっているカズマを先輩に差し出す。

「わん！」

カズマの鳴き声を聞いた先輩は、一瞬ビクツとして驚いたあと、ゆっくりとこちらを振り返った。

「…へえ、犬、ねえ…これが？」

「は、はい…」

俺はギロリと睨みつけてくる先輩から目をそらす。

「ほれ」

「へ？」

「お手しなさい、お手。 さあ早く。 犬ならできでしょ」

「う…」

先輩はカズマの前に手をだしてひらひらさせる。しかしカズマは人間としてのプライドが邪魔をしているのか、なかなかお手をしない。

なんて挑発的な…

「まったく役に立たないわねえ！　ちよつとでも期待した私がバカだつたわ！」

しかしカズマがお手をするより早く、先輩は痺れを切らして立ち上がる。

そしてカズマを道に転がっている小石でも見るような目で見下し、一言。

「お手もできないなんて犬以下ね！　この豚野郎！」

先輩はどこぞの女王様よろしく、カズマに冷たく言い放った。

「ぶ、豚野郎…やて！？　さすがアヤカさん、相変わらずなかなかのドSっぷりやな…」

「……………」

しかしカズマの挑発もむなしく、先輩はカズマを無視してポケットから笛のような物を取り出した。

「ええ！？　無視！？」

無駄に吠えるカズマ。

「なんですか、それ？」

「犬笛よ。知り合いの人が困った時は使いなさいって機械と一緒に渡してくれたの」

「なら先にだしてくださいよ…」

俺の努力はなんだったんだ… まあ別に何もしてないけど。

「忘れてたのよ。まあみてなさい」

そう言っただけ先輩は悪ぶれる様子も無く、犬笛を吹いた。が、何も聞こえない。確か犬笛って人間には聞こえないんだっただよな。

そして待つこと20秒。

「何もおこりませんね」

「そんなはずないわ！」

そしてもう一度、先輩が笛を吹いた。

すると一匹の犬が向こうから凄いスピードで走ってきた。

「おお、本当にきた」

本当に犬笛で犬を呼んだのか？

しだいに走ってくる犬の姿がどんどん大きくなっていく。つまり近づいてくる。

白い毛に被われた犬だ。その目はまるで獲物を狙う獣のように

異様にギラついている。

そして俺の目の前、走ってきた犬は減速するどころかどんどんスピードを上げ、そのまま横にいたカズマめがけて華麗に跳んだ。当然、カズマはそれを避けることもできず――

「グホウ！」

奇怪な叫びを上げ、犬もろともに後ろに吹き飛んだ。

…この犬、今の絶対わざとだよな。

白い毛の犬はカズマの上ですぐに起き上がり、先輩の足元に行っておすわりをした。

「よしよし、よくきたわね。あんたは…柴犬ね」

先輩は犬を撫でながら話しかける。

カズマのことは無視なのか？

「さあシュウ、早く首輪をつけなさい！」

「わかりました」

じっとおすわりをしている犬に首輪をつける。

「つけましたよ」

「よし、じゃあなにか言ってみて、お父さん」

「お父さん！？ …もしかしてこの犬の名前ですか？」

「そうよ、白いし柴犬だし」

まんまパクリじゃないか… ソ トバンクの。

「さすがにお父さんはマズイです。 他にしましょう」

「じゃあ……役立たず」

今、一回カズマを見てから言っただよな。

「ちよおつと待ったああ！！ もしかして役立たずってオレのこと
っすかあ！？」

そう叫びながらカズマは立ち上がり復活する。

「よし！ んじゃあんたの名前は、ナメ太郎にしましょ！」

「無視！？」

カズマはそのまま四つんばいになって崩れた。

忙しいやつだな。

てゆうかナメ太郎って… 可愛いそすぎるだろ。

「ワン」

「「あ」

吠えた。

「なんて言っただんですか？」

先輩の横に行き、機械の画面を覗き込む。すると画面にピピッと文字が出る。

『ああ… 地球、滅びねえかなあ…』

こわッ！？

何言っただこの犬！？

「…これ、言ってること合ってるんですか？」

「ええ… 知り合いの人が間違えることはないって言ってたわ」

ってことは本当か…

「犬が地球の滅亡を願うなんて、世も末やな」

突然、先輩と俺の間にカズマの顔が現れた。

「ひゃ！？ あ、あんたいつの間にか復活したのよ！？」

「今っす。にしてもこんなこと言うなんてナメ太郎、お前…なんかあったんか？」

カズマは優しくナメ太郎に声をかける。

「ワン！」

お、返事したのか。 なになに…

画面を覗く。

『うつせえ！ 馴れ馴れしいんだよ！

うわ… 荒れてんなあ、こいつ。

「まあ落ち着けよ、オレでよかつたら愚痴聞いたるで？」

それでもカズマは優しく声をかける。

「わんわんわん！」

ピピッ

『しつげえんだよこのエセ関西人が！ ちゃんとした関西弁話せ！』

やば、この犬… カズマが気にしてることを…

「こんのクソ犬ウウ！！」

キレたカズマは犬に飛び掛かろうと腰を落として狙いを定める。

「ちょ、待ちなさい！ 犬の言ってることを真に受けてどーすんの

よ？」

しかしカズマは先輩の言葉で動きを止める。

「た、確かにそーっすけど…」

「そんなことくらいで怒るなんて本当に犬以下よ？」

確かに。

「…で、ですよね！？ たかが犬の言うことやしな！ そや！ オレは人間やから犬の言うことなん気にしやんでえ！」

カズマは自分に言い聞かせるように何度もそのセリフを繰り返す。

「わんわん！」

「今度はなんや？ ま、オレは犬の言うことなんどーでもいいんやけどな！」

カズマは無駄に声を大きくして言いながら、画面を見る。

『情けねえなあお前。男のくせに女の言うこと聞いてよお。それでも男か？ ちゃんと《ピー》ついてんのか？ どーせついててもも小さいんだろ？ 粗野郎！』

「…うわ…」

先輩と俺の声がハモる。

この犬… かわいい顔してなんてことを… ああやばいぞ、カズマからどんよりとした変なオーラが—

「————クロス」

「え？ 今何て言っ—」

「キエエエエエエ！…！」

カズマは目をギラリと光らせ、ナメ太郎にまた飛び掛かろうとする。

「カ、カズマ！？ まて！ 落ち着けって！」

暴れるカズマを後ろから羽交い締めにして押さえこむ。

「はっなっせっ！！ おいクソ犬ウ！！ お前も男やったらわかるやろ！！ そこは全然汚したあかん男の聖域なんや！！ 絶対にふれたらあかんのや！！！！ それとなあ！！ オレの中学の時のあだ名はジャン棒や！！！！！！！！」

俺の腕の中で暴れながらカズマは叫ぶ。

「な！？ カズマ、お前…！」

そのあだ名は封印したんじゃないのかったのか！？

「はあ… はあ… ハッ！？しもた！？ つい頭に血がのぼって…！」

「……………」

俺と先輩は言葉を失い、沈黙状態。

「あの、えと… アヤカさん？」

沈黙に耐え切れず、先輩に助けを求めるカズマ。すると先輩は、

「ぶっ！」

いきなり吹いた。

「あはははは！！！！ じ、ジャン棒？ あはは！ や、やめてえ！！
お腹痛い！あはははは！！！！」

先輩はお腹をおさえて大笑いしだした。

まあ、しかたないよな…

カズマは笑われたのがショックなのか、声を出さずにピクリとも動かない。

俺はとりあえず先輩が落とした機械を拾い、何気なく画面を見る。すると新しく文字がでていた。

『なんだ… その、悪く言ってますまなかつたな』

謝ってるし…

「おいカズマ」

「く、くっそおお!!」

俺が声をかけるのと同時に、カズマは叫びながら急に走りだした。

「おいカズマ!? ああもう…先輩、追いかけていいんですか? 笑いすぎですよ」

「あはははは!! む、無理! あははは! お、お腹痛い!」

お腹を押さえ、転げ回って笑う先輩。

カズマ、かわいそうに…

俺がカズマの走って行ってしまった方向を眺め、ぼんやりしていると、犬が足元まで歩いてきた。

「ん? なんだ?」

「わん!」

ピピッ

画面を見る

『人間って、大変だな』

「ああ、お前は気楽でいいな…」

……はあ、帰る。

俺と先輩（アホ）とその他

俺はいつまでも笑い転げてる先輩を公園に残し、帰路についた。

第7話 試作品（後書き）

なんだか自分の文体がわからなくなってきた…

キャラも不安定だし（、、）

俺と先輩（アホ）とその他

第8話 たまにはゆったりと

「…あれ？」

どこだここ？

気が付くと俺は立っていた。　だだっ広くて何も無い所に。　空と地面の区別さえつかない。　全て灰色の世界。

「いやいやおかしいだろ…　俺は昨日普通に自分の部屋の自分のベツトで寝たはずだぞ？」

「シユウ」

突然、後ろから声をかけられて振り向く。

「先輩？　いつからそこに？　ってゆーか、なんですかその格好…」

先輩は大きすぎるロングコートを羽織って立っていた。　しかし、前が留まっていなくて、コートが大きすぎるせいかギリギリ中は見えないが、風でも吹けば一瞬にして中がまる見えになるだろうな。

「なぜだかわからないが、先輩は今中に何も着ていない。　という気が、いや、そんな確信があった。」

「先輩？　無視ですか？」

先輩は俺の問い掛けにも無反応、そして黙ったまま、そっと自分の着ているコートの前のとこに手をかけ…

「せ、先輩？ いったい何をしよう」と

勢いよくコートを開いた。まるで自分の裸を見せつけてくる露出狂のように… もちろん中には何も着ていない。

「うわ！？ …え、ええ！？」

俺はすぐに目をそらしたが、手遅れだった。完璧に先輩の裸が見えてしまっていた。そして、異変に気付いて二度見する。

「ど、どーして…」

胸にあるはずの物が無い。代わりにあるのは無駄にガッチリした胸板だけ…

マ、マッチョだ… 先輩がマッチョになった…

そして俺の視線は胸板からみぞおちに、腹筋に、そして股間に…

「う、うわああああ！？」

化け物だ… あんなの… 人間じゃない…

俺は悲鳴を上げ、先輩（の顔をしたマッチョ）から逃げる。

「一ッ！？」

しかし走っても走っても先輩は追いかけてくる。

「い、いい加減にしてくれえええ！！！！！！」

「ハアツ！？」

目を開けると、俺はちゃんと自分の部屋の自分のベッドで寝ていた。

……夢、か。

俺は上半身を起こし、時計を見る。外は夏も近いせいか、日が昇るのも早くなってきた。

ああ、なんだったんだあの悪夢は……なんか体だるいし、頭も痛い。

熱を計ってみる。

「38度……」

高いな、急に熱がでるなんて……あの悪夢のせいか？　しかたない、今日は学校休むか。

いつも先輩に振り回されてばっかだし、たまには家で一日ゆっくりするのも悪くないな。

俺は学校に今日は休むと連絡を入れた。朝が早いにも関わらず、学校にはもう人がいることに多少驚いた。

さて、寝るか。

俺はもう一度ベットに横になり、もうあんな悪夢を見ないようにお願いながら眠りについた。

「ーやー」

「ん…」

「ーきなさい」

「んん〜…」

「起きなさい！！」

いきなりの怒鳴り声と共に、先輩の顔が目の前に現れた。

「うわ！？ またか！？」

俺は跳び起きて先輩から離れる。

「やっと起きたわね …またかって何よ？」

くそ、また悪夢か！？ 今度はなんだ！？ いったい何をしてくるんだ！？

「お姉ちゃん、シユウ君が怯えてるよ〜？」

先輩の後ろ、先輩の妹で俺の同級生であるモエが立っていた。

今度はモエも一緒か！？

「寝ぼけてるだけですよ。ほら、さっさと起きなさい！」

先輩にほつぺたをつねられる。

「い、いふあいれふ」

…痛い？ つてことは夢じゃないのか？

「お、お姉ちゃん！ シユウ君熱出してるんだからだめだよ〜」

「ふん！ シユウはそんなヤワじゃないわよ！」

先輩はほつぺたから手を離し、俺の頭をぽんぽんと叩く。

「違うよ！ こゝみえて実はシユウ君は傷付きやすいんだよう？」

「いいえ、強いの」

「弱いの〜」

「強い！」

「弱い！」

だんだん目が覚めてきた…

「あの…」

「なに！？」

二人して俺を睨みつけてくる。

「二人とも人の部屋で何してるんですか？」

二人とも制服ってことは、学校帰りか。

「やっとちゃんと起きたわね。熱を出したって聞いたから、あんなの体温をもっと上げに来たのよ」

うわ、ただの嫌がらせじゃねえか…

「違うでしょお姉ちゃん。今日はシュウ君を看病しに来たんですよ？」

「うっ…」

先輩は小さくうめく。

「そーなんですか？」

「そ、そーよ！ あんたがいないとからかい相手がなくてひまなの。 だから早く治しなさい！」

「えと、ありがとうございます。 明日には学校行くんで大丈夫です」

「ほ、他にやることがないだけよ！ いいから寝てなさい！」

「わかりました」

「なんか作ってくる！」

先輩は顔を真っ赤にしながら部屋を出て行った。

相変わらずにぎやかな人だな。

「あ、シュウ君これ」

モエが何かを思い出したようにカバンに手を入れ、プリントを取り出して渡してくれた。 学校からの配布物だろう。

「あれ？ どうしてモエが持つてるんだ？」

クラス違うのに。

「えと、カズマ君がシュウ君に渡しといてくれ〜って言ってました」
なるほど、カズマのやつ、めんどくさいからってモエに渡しやがったな。

「わざわざわるいな。カズマには今度きつく言っとくから」

「あ、いいんだよ別に！？ おかげでシユウ君の家にこれたし…」

モエは顔を赤くして自分の前で両手をぶんぶんと振りまわす。

「俺ん家に何か用でもあったのか？」

「いやっ、そーじゃなくて… あの… うう…」

もごもごと口ごもったモエは半泣きになり、そのまま部屋を出て行ってしまった。

「え？ ちょっと待っ—」

バタン

俺の声も虚しく、部屋のドアは閉まってしまった。

…俺、何かしたか？

「あんだ、またモエのこと泣かしたの？」

手に鍋を持った先輩が呆れながら部屋に入って来た。

「いや、俺は別に何もしてないんですが」

「ったく、あんたももうちょっと女心つてのを勉強した方がいいわね。はい、おかゆ」

先輩は鍋からお茶碗におかゆを入れて俺に渡す。

「ありがとうございます。　なんだかんだいって先輩も優しいところあるんですね」

「うるさい。　黙って食べなさい」

先輩は少し照れたような、怒ったような顔をしてそっぽを向いた。
わがままで自由な先輩でも、少しは常識的なところはあったんだな。

…あ、そーいえば。

「あの、先輩」

「ん〜？」

先輩は部屋に置いてあった漫画を読みながら適当に返事を返す。

「どーやって家に入ったんですか？　親もいないのに」

「合鍵〜」

「そー…　ですか…」

前言撤回。　やっぱり先輩は非常識だ。

俺と先輩（アホ）とその他

第8話 たまにはゆったりと（後書き）

あとがきって何かけばいいんだろー）
、
、
（

第9話 買い物 その1

「大事な話があるんやけど」

昼休み。

俺が自分の席で昼飯を食べていると、カズマが深刻な顔をして話しかけてきた。

「どーしたんだよ？ マジな顔して」

「あのな…」

カズマは言いにくそうにもじもじしながら、

「付き合ってくれへんか？」

と言った。

…はっ!？

「どーゆー意味だ？」

「そのまんまの意味や!」

カズマは真剣な瞳でまっすぐ俺を見つめてくる。そしてなぜかその視線が熱っぽい。

「カズマ… お前、俺のことをそんな目で見てたのか…?」

「…はい？」

「前々からそーじゃないかとは思ってたんだが… まさか、本当だつたとわな…」

「え？ なにが？」

「悪いけどお前の気持ちには答えられないぞ、俺にはそっちの気はないんだ」

「なにがやねん！？ ふざけてやんとちゃんと話聞け！」

「なんだよ？」

「だから付き合ってくれって！」

「お前と？」

「オレに！ や！ もうすぐ妹の誕生日やから、プレゼント買いに行くんに付き合ってくれってことや！」

「ああ… なら始めからそー言えよ。 変な勘違いしちまったじゃねーか」

「わかるやる普通！？ まあええわ。 んで、放課後空いてるんか？」

「まあ空いてるけど… 何か用でもあるのか？」

「だあかあらあ！ 妹の誕生日プレゼントを買いに行くって言ってんねん！」

ほとんど発狂しながら大声で叫ぶカズマ。

「少しからかいすぎたか？」

「わかってるって」

「はあ、 んじゃとりあえず放課後な」

大袈裟にため息をつき、カズマは教室から出て行った。

放課後。

「それで、あんたの妹は好きな物とかないの？」

前を歩く先輩が、俺の隣にいるカズマに質問する。

俺達は今、近所のショッピングモールに来ている。

そしてここに来る途中、学校帰りの先輩とモエに偶然ばったりと会ってしまった、なぜか二人も一緒に行くことになった。

「ん〜 あんま知らないっす」

俺たちはとりあえずショッピングモールをぶらぶらしながらカズマの妹のプレゼントを探す。

「妹の好きな物くらいわかつときなさいよ。そうね… わからないんならモエに選んでもらえば？ 同じ妹どうし趣味合っんじゃない？」

と、なにやら理不尽な理屈をのべる先輩。

「そうすか？ んならお願いしよっかな。ええか？」

そう言っただけカズマは一番後ろを歩いていたモエの方に振り向く。

「ありゃ？」

変な声を出すカズマに若干引きつつ、俺もつられて後ろに振り向く。

「あれ？」

モエがいない。

「どこ行ったんや？」

「さっきからいなかったわよ？ はぐれたんじゃない？」

カズマの疑問に前を歩いていた先輩が答える。

「モエがいないの、気付いてたんですか？」

「当たり前じゃない？ 私はモエのお姉ちゃんよ？」

先輩は腕を組み、俺を小ばかにしたように答える。

当たり前なのか…？ 意味がわからない…

「いないってわかってたなら早く言ってくださいよ…何かあったらどーするんですか？」

「いいじゃない、いつものことだし」

自分の妹がいなくなったというのに、まったく動じた様子もなく、先輩はどこまでも冷静だ。

モエがいなくなるのって、そんなによくある事なのか？

「とにかく搜しましょう。まだ近くにいるかもしれませんし」

「どっかで絡まれてるかもしれんしな」

「今どきそんなヤツいないでしょ」

「そつすよね〜」

何がおもしろいのか、けらけらと笑うカズマと先輩。

どーして二人ともこんな冷静なんだ？ 心配じゃないのか？

…しかたないな。

「心配なんで捜してきます」

俺はほんわかムードの二人にそう言っ
て、今来た道に戻って行っ
た。

「…いた」

あれから10分、ようやくモエを見つ
けることができた。

俺は道の真ん中でキョロキョロし
ているモエに近づき、話しかけ
る。

「おいモエ、何してるんだ？ 先輩
が心配して… なかつたけど探
しにきたぞ」

「あ、シュウ君！」

モエは俺の姿を見たときぱあっと
笑顔になる。

「こんなところで何してるんだ？」

「えっと、みんなの後ろを歩いて
たら、急に女の子に服をつかまれ
て… 気がついたらみんなもうい
なくて…」

気がついたらって…

「女の子って、知り合いかなんかか？」

「ううん。道を聞かれたの」

「…ちよっと、無理がありすぎやしないか？ うそをつくならもつとましなうそを—」

「違うよう！ほんとだよ？ 背がこれくらいで、髪が空色をしてて、目が透き通ってるみたいなまるでお人形さんみたいな女の子！」

モエは手をぶんぶん振り回して、必死にその女の子を再現しようとしているが、全く伝わらない。

「で、その女の子はどーしたんだよ？」

「道を教えてあげたら何も言わずに、頭だけさげてどっかに行っちゃっていました」

「うそくさ」

「ほんとなんですよう…」

モエは涙目になりながら訴えかけてくる。

なんでそんな必死なんだ？

「わ、わかったから泣くなよ。ほら、先輩のところに戻るぞ」

「は、はい〜」

空色の髪の女の子か。見たことないな。やっぱうそなのか？

そーいえば空色ってスカイブルーともいうよな。

って俺はいつたい何を考えてるんだ…

第9話 買い物 その1（後書き）

みなさんお久しぶりです。

え？ 更新が遅い？ H A H A H A !

キノセイデスヨ（´、`）

第10話 買い物 その2

こんにちは。 モエです。

今は迷子になったモエを捜しにきてくれたシュウ君と、二人でシヨッピングモールを歩いているところです。

となりを見ればシュウ君の横顔。 ああ、カツコイイなあ…

「なんだ？」

視線に気付き、こっちを向くシュウ君。 うん。 正面から見てモカツコイイ…

「はあう〜」

「モエ？」

「ふえ！？ や、なんでもないよう！？」

「ぼーっとしてるとまた迷子になるぞ」

「う、うん。 ごめんなさい」

いくらカツコイイからって見すぎちゃだめだよな。 失敗失敗。

「別に謝らなくてもいいけど。 あれ、先輩達どこ行ったんだろ？ 場所間違えたかな」

シユウ君は急に立ち止まり、首を傾げながらぶつぶつ言いだしました。

… あ、もしかして今シユウ君と二人つきり！？ 気付かなかった…

ど、どーしよ！？ ああ、なんだか緊張してきちゃった！

落ち着くのもモエ！ これはチャンスよ！ これをきっかけに一気に二人の距離を縮めるの！

「あ、あのー！」

「ん？ なんだ？」

「せ、せっかくだし二人でぶらぶらしませんか！？ そしたらそのうちお姉ちゃんたちにも会えると思うし…」

「ん〜 そうだな。じゃあ行くか」

やった！ よーし、あわよくばそのまま… エへへ…

「おーい、置いてくぞ〜？」

「ま、待ってくださいー！」

俺と先輩（アホ）とその他

た。
「じじしてモエとシユウ君の（らぶらぶ？）（初デートが始まりました。

第10話 買い物 その2（後書き）

アヤカよ！ 今回から私が司会進行で、ちょっとしたコーナーでもやろうと思うの！

「題して『とりあえず突撃してみる！』よ！」

今日はシュウのところに行くわよ！ ていつ！

「わっ！？ 先輩！？ どこからわいたんですか！？」

「もうそのリアクションは飽きたわ。 それより何してんのよ？」

「見ての通り宿題をしています」

「くだらないわね」

「意味がわかりません」

「まあいいわよ。 今日はこのへんで帰るわ」

「は、はあ…！？」

「じゃあねー！」

「え、それだけですか！？」

「ていつ」

俺と先輩（アホ）とその他

「……消えた。
うそだろ？」

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0118e/>

俺と先輩（アホ）とその他

2008年9月8日00時15分発行